

中国における日本文学の受容

工 藤 茂*

はじめに

1984年8月から1985年7月まで、おおよそ1年間北京に滞在した。北京語言学院の教3楼に設置されていた、在中華人民共和国日本語研修センターの講師としてである。120名の研修生は皆中国人であったが、幸い日本語を修めた大学の教師が中心であったので、日本語で講義ができた。中国語の不自由な者に講師が勤まった所以である。

その間、中国語の不自由な者にもできる研究はないかと考えていて、ふと思いついたのが、1982年12月号の『文学』(岩波書店刊)の特集であった。それは『外国人の日本文学研究』という特集で、そこには、北京師範大学講師の何乃英の『『源氏物語』の女性像の典型とその意義』という論文と、中国社会科学院外国文学研究所研究員の李徳純の『戦後日本文学概観』という論文が収められていた。前者は『源氏物語』を「平安朝後期の宮廷貴族生活が腐敗し、精神が墮落していたことを反映し」た物語としてとらえた上で、空蟬、末摘花、明石上、紫上、浮舟をその女性像の典型として取り上げて検討を加えた論文であり、後者は戦後の日本文学を「日本資本主義社会を暴露し批判している作品は数の上では多いとは言えないが、やはり文学発展の主流であり、一つの方向を代表するもの」(今西凱夫

訳)という観点からとらえた論文であった。私はそこに、両者に共通する観念的な視点を見る思いがした。中国ではこのような観点から日本文学をとらえているのであろうか。この疑問を解くために、可能な限り中国における日本文学受容のあり方を探ってみよう。そう考えてその資料を集め始めた。ところがこの資料集めの中々困難であることが、次第に分かってきた。というのも、北京では日本のように書店の店先に雑誌が積まれているわけではない。ガラス窓に遮られた報(新聞)売り場の内側や、郵局(郵便局)のガラスケースの中に雑誌が置かれていて、自由に手に取って見ることができないのだ。しかも、これは後で分かったことであるが、必要な雑誌は千冊は掲載されているかと思われる目録を郵局の窓口で見せてもらい、その中から選んで予約しなければならず、その予約期間も限られていたのである。

結局、私が集めることのできた資料は、膨大な資料の一部になってしまった。しかし、そこからでも、現代の中国における日本文学受容のあり方は、うかがえるのではないかと思われる。したがって、以下それについて述べてみたい。

1 研修生の日本文学受容

(1) 研修生のレポートの場合

まず身近なところで、日本語研修センターの第5期研修生の日本文学受容の様子から述べて

*別府大学文学部国文学研究室

みることにする。

日本語研修センターという名称は、日本側のそれであって、中国側ではこれを日語教師培训班と呼ぶ。故大平氏が総理の時、対中国日本語教育特別計画の5カ年計画として、昭和55年8月に発足したので、現地では俗に大平学校と呼んでいる。研修生は全員中国の高等教育機関の日本語教育の担当者である。この日本語教師の能力を高め、日本語、日本文学、日本事情を研究する方法を修得させることが、その目標となっている。

研修生は毎年約120名。センターの年間スケジュールは、前期が9月1日から翌年1月10日まで、後期が4月3日から7月9日まで。その間に1月11日から春節をはさんで2月25日までの在宅研修と、2月28日から3月29日までの1カ月の訪日研修とがある。

研修生には、上記の在宅研修期間中に研修レポートが課せられる。テーマは自由であるが、上記の研修目標に沿ったものを各自が選択して作成するものだ。

研修生は必ずしも日本文学の専攻者ではなかった。むしろ、外国語としての実学的な日本語の能力を持っている者が多かった。しかし、提出されたレポートを見ると、日本文学に関するものが意外に多く、120名中31名にものぼった。その内訳を列記すると次のようになる。

芥川龍之介 5名。 古典 4名。 夏目漱石 4名。 川端康成 3名。 樋口一葉 2名。 太宰治 2名。 井上靖 2名。

国木田独步、島崎藤村、森鷗外、武者小路実篤、葉山嘉樹、中島敦、三島由紀夫、松本清張、星新一、各1名。(合計31名)

古典を対象としたレポートで取り扱われていた作品は、『万葉集』『古今和歌集』『古事記』『蜻

蛉日記』であった。ただし、川端康成の『雪国』に織りこまれた雪のイメージに、古典和歌のそれを探った「古典和歌の雪と『雪国』の雪」という劉徳潤君のレポートは、古典と現代文学の両者に亘るものであろうが、そのウエイトが『雪国』に置かれているので、川端康成の項に入れた。劉君はすでに、同様の方法で川端康成の掌の小説数篇に美を追求した「読川端康成〈掌中小説〉—“川端文学”美学根源初探」という論文を書き、1982年7月、済南で行われた第2次日本文学討論会の席上で発表している。文学の伝統と美という観点に立って、日本文学を受容しているひとりで、劉君のような受容の仕方も現在の中国ではなされていることを知った。

一方、比較文学の方法によって日本文学を受容しているレポートもあった。それは孫久富君の『『貧窮問答歌』と『村居苦寒』について—比較文学の視点から』、楊永良君の『『古今集仮名序』に出現した矛盾とそれから見出すことのできる中国詩論の影響』、孔令敬君の「芥川の〈尾生の信〉」、張琳君の『『酒虫』と『酒虫』』、李大川君の「芥川龍之介の作品における中国像」などのレポートに見いだすことができた。すでに触れた劉君のそれもまた、比較文学の方法によったものと言うことができよう。

孫君のレポートは、山上憶良の歌と白居易の詩とを取り上げ、その影響関係をではなく、両者の生活した時代の様相、社会環境、地方官吏としての同じような体験の分析を通してこの類似を述べた、200字詰原稿用紙40枚の力作であった。

楊君他4人のレポートは、それぞれの作品に及ぼした中国の作品や中国の姿について述べたものであったが、ことに孔君と張君のレポートは、『戦国策』や『聊齋志異』の当該説話を、芥

川がどのように小説化したか、その手法を追求して面白いレポートとなっていた。

提出された31篇のレポートに、「はじめに」の項に述べた観念的な視点によってとらえたものが皆無だったわけではない。徐萍さんの「プロレタリア文学の開花—『セメント樽の中の手紙』をめぐって」、李汝敏君の「現実暴露の傑作—独歩の『竹の木戸』について」などのレポートには、そのような観点からの作品へのアプローチがうかがわれた。しかし、そこに社会主義のイデオロギーによって、作品を裁断し否定しようとする態度は見られなかった。むしろ、そういう観点を導入しながら、なおかつ作品の特質をとらえようとする努力がうかがわれた。このような傾向は、大なり小なり他のレポートや、後述する雑誌の論文にも見られることであった。

なお参考までに、レポートに取り上げられた上記以外の作品名を列挙しておこう。

「伊豆の踊子」「日向」,「走れメロス」「お伽草紙」,「大つごも」「にぎりえ」「十三夜」「たけくらべ」「わかれ道」「われから」,「猟銃」「闘牛」,「吾輩は猫である」「それから」「坊ちゃん」「二百十日」「野分」「草枕」「夢十夜」,「破戒」,「羅生門」「蜘蛛の糸」「支那遊記」「上海遊記」「江南遊記」「長江遊記」「北京日記抄」「雑信一束」,「友情」,「高瀬舟」,「憂国」。

中島敦を対象にしたレポートには、作品に関する言及はなかった。松本清張、星新一を対象にしたレポートは、それぞれの人と文学を紹介したもので、作品を具体的に論じてはいない。そのため、上に作品名を挙げることはしなかった。

ところで、ある研修生が私のところに来て、中国人は波瀾に富む面白い小説でなければ読まないと言う。そして森村誠一、松本清張のこと

を、人気のある作家だと言った。またある研修生は、「典子はいま」(TV)の原作を翻訳したいと言う。それが中国の読者には受けるだろうとのこと。書店のウィンドウに黒柳徹子の『窓ぎわのトットちゃん』,穂積隆信の『積木くずし』,それに沢村貞子の著書などの翻訳書を見かけたのには、そのような背景があったのであろう。ちなみに「窓ぎわのトットちゃん」の翻訳名は、「窓旁的小桃桃」,訳者は王克智である。

(2) 『日本語教育研究論纂』

国際交流基金から、『日本語教育研究論纂』という雑誌が刊行されている。これまで刊行されたのは、第1集から第4集までの4冊である。しかし、今後はもう刊行されないだろう。というのも、この雑誌がじつは、在中華人民共和国日本語研修センターの紀要だったからである。日本語研修センターは第5期で一応その役割を終え、北京外語学院大学院の修士課程へと発展的に解消した。さて、この雑誌に第1期から第5期までの研修生が日本語で書いた論文が載っている。そこに扱われている作家及び文学事項を、その多い順に挙げてみよう。

古典 7件。 芥川龍之介 3件。 国木田独歩 2件。 夏目漱石 2件。 太宰治 2件。 井上靖 2件。 大江健三郎 2件。 島崎藤村、樋口一葉、志賀直哉、横光利一、川端康成、坂口安吾、円地文子、大岡昇平、野間宏、遠藤周作、各1件。 萩原朔太郎 1件。 自然主義の文学、新感覚派の文学、各1件。

古典7件の内訳は、『万葉集』2件、『古今和歌集』、『新古今和歌集』,「古典和歌」各1件、『蜻蛉日記』,『雨月物語』各1件である。

上記のうち、扱われている内容が現代文学と古典に跨る論文がひとつあるから、実際の論文

は32篇になる¹⁾。これは文学に関する論文だけであって、他の論文、たとえば日本語と中国語の対照研究、類義語語彙に関する研究、文法研究、日本事情研究などの論文は含まれていない。

さて、文学に関する32篇の論文の内容を眺めてみると、それはたいへん多様であって、一方に偏った顕著な傾向を見ることはできなかった。ということは、日本語研修センターの日本人講師の指導もさることながら、研修生自身が、日本の文学を相当に自由な態度で受容していることを示すものと思われる。

中国における外国文学の受容の仕方に、啓蒙的な紹介がある。第1集掲載の「日本自然主義文学思潮ノート」(郭来舜)、「新感覚派の文学について」(金煥璣)、および、第2集掲載の「夏目漱石の『それから』の中の百合の花と色彩」(張拓秀)等の論文は、そのような傾向を示している。それまでに日本で出版されたり発表されたりした資料をもとにして、それを紹介する形で論文が書かれている。おそらく、日本語研修センターで学んだ結果生まれてきた論文であろう。

文学の中国的な受容を日本のそれと比較した面白い論文に、「独歩の詩情と人間観—『少年の悲哀』『窮死』について」(韓貞全)がある。この論文は独歩の上記2作品について論じた後に、「次に中国の場合と結びつけて私見を述べてみたい」と断ったうえで、次のように書いている。

日本人は自然に親しみ、自然の中で問題を解決する傾向が強そうである。(中略)中国人の発想ではかならず運命に屈せず、たちあがって自然と戦い社会の悪勢力と暗黒と戦って、自由と生存をかちとろうとする。明治三十、四十年代、中国には義和団などの農民隆起が勃発し、国内外の悪勢力と戦い、光明と自由をかちとろうとしたのであ

る。一致団結して光明を迎えるというのが中国人の発想だと思う。

(前略) 徳二郎が娼婦に手助けをしなかったこと、辨公が死にかかっている文公を自分の家から追い出した(こういってもよかろうか) ことなどは仁義に反するのではないだろうか。

ここには、論文の対象が小説であることをふと忘れた筆者の本音が、思わず出てしまったのであろう。それだけに、逆に、中国人の文学受容の典型的なありようが窺える部分であった。この論文は第1集に掲載されたものであるから、筆者は第1期か第2期の研修生になるわけだが、第5期の研修生の文学のレポートにも類似の見解が多く見受けられたから、そう考えて差支えがなろうと思われる。これは文学の道徳的、倫理的受容の例である。

『顔の中の赤い月』を読んで(徐瓊)と『俘虜記』と『野火』における生と死(俞瑜)という2つの論文は、それぞれ野間宏と大岡昇平の戦争文学を、その対象に取り上げた論文である。前者は当該小説を「人間が究極の立場に置かれたとき、自分を守るために他人を見捨てるというエゴイズムを暴露している」ものと捉え、後者はその2作品を「死に直面した人間の心理、つまり限界状況にまで追われた兵士の孤独と生への執着を深くほりさげ、生と死、神と人間、倫理と本能などの鋭角的主題を扱っている」小説と捉えている。いずれも的確にそれぞれの小説の特質を捉えた論文であった。参考までに両者の結論部分を引用して置こう。

前者の結論部分

『顔の中の赤い月』というロマンティックなテーマに、作者はリアルな内容を書いた。「顔」によって、人間のどうしようもな

いエゴイズムが反映されたと同時に、「人間が他の人間を愛することの高さ」も教えてくれたと思う。作品の中で、人間の愛というものは大切にすべきだということも示されたのである。

後者の結論部分

大岡氏は戦争の異常な体験を通して極限状況下の人間の生と死の問題をとりあげその真実を追求した。それによって作者の自我発現が行なわれたわけだが、のみならず、そこには人間の実存に関して非常に重大な意味も存在している。すなわち、人間は戦争のような異常な状況におかれると、生のあれこれの動機と欲望を失うとともに、人間であるための社会的条件を喪失してしまい、そのため、「死」とは何物でもない、ただ確実な死を控えて今私が生きている。」という無意味な生の一点と化してしまったような存在になるというのである。

日本の文学と中国の文学を、なんらかの形で比較している論文は、全部で7篇ある。漢詩の技巧「起興比」のうち「起興」の手法を一部の防人歌に見ようとした「防人歌論」(霧書明)。上田秋成『雨月物語』中の1篇「菊花の契」をその原典「范巨卿雞黍死生交」と比較しながら論じた「菊花の契—『死生交』と対照させながら」(宿久高)。『戦国策』『漢書』『史記』のそれと、芥川の「尾生の信」について検討を加えた「芥川の『尾生の信』」(孔令敬)。『聊齋志異』の「酒虫」を芥川がどのように小説化したかを論じた「芥川龍之介『酒虫』考」(張琳)。『文選』『説苑正諫』それに『莊子・齊物論篇』を視野に収めながら太宰治の小説「魚服記」を分析した「太宰治の『魚服記』について」(劉香織)。山上憶良の歌と白居易の詩を比較検討した「『貧窮問答

歌』と『村居苦寒』の比較」(孫久富)。『古今集』序の六歌仙評に孔子の「文質彬彬」説を見ようとする「孔子の『文質彬彬』説と古今集序の六歌仙評」(楊永良)²⁾。これらは、いずれも中国人である研修生にとって、頃合の主題であったと言えることができよう。

以上7篇の論文のうち、「太宰治の『魚服記』について」(劉香織)は、多角的な観点から『魚服記』を検討していて、注目に価する論文である。ちなみにその構成を示すと以下の通りである。

一、太宰治の文学活動の概略と文学精神の形成

二、「魚服記」について

1、「魚服記」創作当時の太宰治

2、「魚服記」の特徴

(a) 「魚服」についての伝來說

(b) 「魚服記」に見られるフォークロア的要素と津軽の風土の影響

(c) 「魚服記」における太宰文学の特性

—現実と超現実との融合

三、まとめ

この論文は「中国では太宰治を墮落的な作家といわれ、その評価は低く、紹介されている作品もごくわずかである」とその冒頭で断わっており、中国における太宰文学受容の一つの姿を示していて興味深い。その太宰の小説「魚服記」に多角的な検討を加えた筆者は、その結果を次のようにまとめている。

(前略)「魚服記」は太宰治が実生活の中で挫折し、まさに社会主義運動から脱落したことに罪悪感を抱き、生きることに絶望した時期に書いた作品である。

この時の太宰は専ら文学の世界に道を求めようとした。太宰は魚服という中国の古い伝説や東北地方の民間説話から養分を汲

み取り、津軽の風土による多くの要素を織り込みながら、現実と幻想という二つの世界の融合を芸術化させてみせたのである。

「魚服記」には作家の深い人間不信や孤独な心情が現れており、また運命の束縛から脱却したいという願望が託されている。

以上の論文以外で印象に残るのは、「遠藤周作の文学と宗教」(譚晶華)と「草、鳥、犬、猫と詩—萩原朔太郎の詩における形象のとらえ方」(李明)の2論文である。前者は遠藤の願う宗教を浄土宗とジャンセニズムのないまぜで、超カトリック的なものと言い、その文学における宗教意識は、彼の宗教への熱愛の現れというより、むしろ日本民族と日本文化への熱愛の現れだと見る。そしてその視点から彼の文学を論じている。核心に触れた論ということができよう。後者の論文は、萩原の詩に形象化されている草、鳥、犬、猫に、彼の心情がどのように投影されているのか、またそれらの形象は何を象徴するのかを追求して面白い論文となっていた。

2 洛陽における第3次全国文学討論会

1985年6月上旬、洛陽において第3次全国日本文学討論会が行われた。このことについては、すでに、昭和60年8月13日の『日本経済新聞』文化欄に、呉念聖氏が原稿を寄せている。それによると、中国各地からの参加者は120人、その内訳は大学教師、院生、編集者等であったという。その中には、かつて我が国の高村光太郎や草野心平と詩を創っていた、四川外語学院の黄瀛教授の姿もあったと書かれている。じつはこの会に、北京の国際関係学院から日本語研修センターの第5期研修生として来ていた孫久富君も参加した。

この会は第1次が1979年に長春で行われ、第

2次が1982年に済南で持たれている。この第2次の会に、同じ第5期の研修生劉徳潤君が参加して、川端の掌の小説に関して研究発表をしたことは先に書いた。第3次の会に参加した孫久富君は「徬徨的青春、時代的迷羊—評夏目漱石の長篇小説《三四郎》」という論文を持って、シンポジウムに臨んでいる。孫君からその様子を詳しく聞くことはできなかったが、資料を見せてもらうことはできた。そこで、呉念聖氏が『日本経済新聞』に寄せたその会の報告³⁾をもとに、それを補ってみたいと思う。

洛陽での会は、最初に4つの分科会にわかれて持ち寄った論文を読み、議論した上で代表を選び、大会で報告したという。呉氏によれば4つの分科会とは「古代(上代から近世まで)、近代(明治大正文学)、現代(終戦までの昭和文学)、当代(戦後文学)」である。孫君は当然「近代」の分科会に参加したものと思われる。

さて、稿を進める便宜上、呉氏の報告を8つの項目にまとめてみたい。

1. 「源氏物語」については、そのメインテーマは何か、宮廷闘争かそれとも男女の愛か、という点について大いに議論された。
2. 夏目漱石の「三四郎」と「明暗」、島崎藤村の「夜明け前」などに登場する主人公の姿を通して時代の目をつかもうという論文が関心呼んだ。
3. ロマン主義の観点から島崎藤村と土井晩翠の詩歌を比較検討する試みがなされた。
4. いままで石川達三の「生きてゐる兵隊」については反戦作品という定評があったにもかかわらず、ある研究者が大会で「異義申し立て」の論文を発表した。
5. ドイツのカフカの「変身」と中島敦の「山月記」と井上靖の「狼災記」の3作品を“変

身文学”としてとらえ、比較した論文も異色であった。

6. 三島由紀夫と太宰治を対象にして「滅びと美の芸術」という題の論文を書いた若い女性研究者は注目を集めた。
7. 中上健次「十九才の地図」、三田誠広「僕って何」、高橋三千綱「九月の空」「退屈しのぎ」、村上竜「限りなく透明に近いブルー」、つかこうへい「蒲田行進曲」なども論文によって紹介され、日本文壇の動向をつかもうという努力もうかがえた。
8. 遼寧省の春風文芸出版社から、35巻の「日本文学大系」が出るのが、大会で公表された⁴⁾。

以上は呉念聖氏によって報告された、最も新しい中国における日本文学研究の状況であると言っておく。

2の項目で紹介されているのは、前述の孫久富君の論文と、日本語で書かれた上海師範大学の楊国華氏の「『明暗』の主題と人物」という論文である。それと、東北師範大学の倪玉氏の「論悲劇人物青山半蔵」という論文と思われる。漱石については、その他に北京師範大学の何乃英氏の「夏目漱石—日本近代文学的傑出代表」という論文もあった。

3の項目で紹介されているのは、羅興典氏の「試論日本近代浪漫主義詩人島崎藤村和土井晚翠の詩歌風格」という論文である。藤村の詩「潮音」「初恋」「千曲川旅情の歌」を、晚翠の詩「星落秋風五丈原」「詩人」「荒城の月」にそれぞれ対比させながら、同じ浪漫主義詩人とされる両者の詩の質の相違を明らかにした論文であった。

4の項目については、孫利人氏（吉林大学）の「『活着的士兵』は反戦作品嗎？」という論文

と、柯森耀氏（上海師範大学）の「試論石川達三『活着的士兵』』という論文があったが、呉氏の紹介しているのは前者の論文であろう。これは火野葦平の「麦と兵隊」と石川達三のそれとを取り上げながら、4の項目のような問題提起をしている論文である。

5の項目で紹介されているのは、郭来舜氏（蘭州大学）の「三『記』的比較研究—カ夫カ『変形記』、中島敦『山月記』、井上靖『狼災記』之比較」という論文である。これはマルクスの「每一个变形形象、在某種程度上可說是臨終的傑作、在某種程度上則是新的偉大詩篇序曲……。」ということばを掲げ、『変形記』と『山月記』は「可說是臨終的傑作」であり、『狼災記』は「則是新的偉大詩篇的序曲」であるとす。

6の項目で紹介されている論文は、周学軍氏（天津外語学院）の「毀滅与美的芸術—三島由紀夫与太宰治」という論文である。太宰治に関する論文は、他に周平氏（上海外語学院）の太宰治の生涯と文学を論じた「太宰治的生平与文学」というのがあった。

これで呉念聖氏の報告についての補足説明を終わるが、以上の他に、黒島伝治、壺井繁治、幸田露伴、川端康成、芥川龍之介、堀辰雄、織田作之助、野間宏、自然主義・浪漫主義・白樺派の文学、私小説に関する論のあったことを付け加えておきたい。

3 雑誌および翻訳書に見る日本文学の受容

(1) 日本語、日本文学の専門誌以外の雑誌
後述するように、中国では日本語および日本文学専門の雑誌が出版されている。しかしここでは、それ以外の雑誌に日本の文学がどのように紹介されているかを展望してみよう。

『江城短篇小説月刊』という日本の週刊誌大

の雑誌がある。その1984年第8期号を、たまたま地下鉄駅の売店で買った。吉林市江南大街にその編集部があり、吉林市郵電局が発行している月刊誌である。その中に陳舜臣の「東方来客<長安日記>之一」と、笹沢左保の「不懂女性心理的罪犯」という小説が載っていた。前者は刁郁舒、尤蘊実訳、後者は尹平訳、前者は中央公論社刊『長安日記』から訳出したという注があり、陳舜臣の略歴が紹介されている。しかし、後者はその小説の訳文が載っているだけであった。

友誼賓館内の郵局で購入した雑誌に『文芸欣賞』(1984年第9期)⁵⁾と、『報告文学』(1984年第9期)⁶⁾がある。前者には「日本撮影家と<桂林夢幻>」という孔健の書いた久保田博二の紹介があつて、そのカラー写真2枚が掲載されている。後者には八木道子の「厨房里的詩」という文章が金君子の訳で載っている。これには作者と作品の紹介があつて、それによるとこの作品は、1981年読売新聞が行った第2回婦人エッセイ募集⁷⁾の際、佳作2篇に入ったうちの1篇だという。この1篇はひとりの女性の経歴の記録だが、あたかも小説の如く、男、女主人公の自尊、自愛、高尚、品德によって、博く読者の賛嘆を得、選考委員会もこれを高く評価している、と紹介されている。

以上の雑誌は文学、芸術の分野の雑誌ではあつても、割合に一般向けの性格を持ったものであつた。次に取り上げようとするのは、やや専門的で、外国文学専攻者を対象にしたものかと考えられる。そういった点において、必ずしもこれが、中国における日本文学受容の一般的傾向だとは、言えないであろうけれども、以下にそれを紹介してみたい。

『世界文学』(中国社会科学出版社出版、北京報刊発

行局発行)この雑誌は220×140の大きさで、毎号320頁、双月刊つまり隔月刊の雑誌である。

1984・4号一表紙を加山又造の版画「月」で飾り、表紙裏にも氏の版画「月」「雪」「花」を掲げている。裏表紙は平塚運一の版画「北風、千葉国府台」、裏表紙の裏にも同氏の版画「雲崗瑞雲」「裸女天平鬼瓦」「啄木鳥」が刷りこまれている。

この号は「日本電視文学劇本」と題して橋田寿賀子の「阿信」が王維平訳で掲載されている。ちょうどおしんが米一俵で中川木材店に奉行に出されるころから、おしんが雪の中に倒れていたのを救った逃亡兵の俊作が、憲兵に撃たれて死ぬ場面まで、142頁をさいて掲載されている。この「おしん」は翌1985年北京のテレビで放映された。テレビではその他にも「血疑」と題された「赤い疑惑」、「一休さん」などの日本のテレビが、吹き替えて放送されていた。

この雑誌には「世界文芸動態」という欄があつて、この号では、山崎豊子が北京に来て中国の読者と会見したこと、中村草田男が芸術院恩賜賞を、河野多恵子、中村汀女、磯田光一が芸術院賞を、それぞれ受賞したことが報じられていた。

1985・1号一「世界文芸動態」欄に、吉田精一の逝去、木下順二が芸術院会員になることを拒否したこと、第11回大仏次郎賞が金石範の『火山島』、芳賀徹の『絵画世界』にそれぞれ与えられたことが、紹介されている。

1985・2号一この号は戦争題材作品の小特集が生まれ、大岡昇平の「俘虜記」が申非訳で載っている。冒頭に編者による作者と作品の紹介があり、大岡自身に俘虜となった経験があること、1971年に日本芸術院会員の称号を拒んだことなどが紹介されている。また作品については、

作者が心理分析の手法によって、自分が俘虜になった経過と心情を描くとともに、人間の運命と存在価値を探索することによって、兵隊の反戦情緒を反映させることのできた小説となっている、と解説されている。

「世界文芸動態」欄では『日本文学的現在 (1984年)』の見出しのもとに、『文学界』1985年1月号に掲載された座談会を取り上げて、1984年の日本の文学状況を紹介している。

1985・3号—林林訳になる「正岡子規俳句選」が掲載されている。子規の句から53句を選び、春夏秋冬に分けて配列し、注を加えている。一例を挙げてみよう。

正值糸瓜花開時，
喉痰淤塞成佛去。

清涼糸瓜水，
難治一斗痰。

糸瓜是止咳消痰的藥材，曾在自己的院子做棚種植，作為自己的藥用。

這是絕筆的第一、二句。子規的病狀，1902年9月10日起，兩腿浮腫，一點也不能動彈，但精神却很安穩，意識到死神已迫近，終于在19日午前一時逝去。

なお、中国では中国化した俳句『漢俳句』が作られている。北京師範大学に鐘敬文教授を訪ねた時、教授の作った漢俳句を示されたし、訪日研修から帰国した孫久富君からも、日本で作った漢俳句を見せられた。それは漢字5字、7字、5字を3行書きにしたもので、中国の新しい詩型の誕生と考えられるものであった。

さて、この号の「世界文芸動態」欄には、三浦朱門が文化庁長官に就任したニュースと、石川達三逝去のニュースが取り上げられていた。

『外国文芸』（上海訳文出版社出版，上海市報刊發行處發行）この雑誌は220×140の大きさで、毎月320頁、双月刊の雑誌である。

1985・1号には「高橋揆一郎小説兩篇」の見出しのもとに、彼の「浅藍色的圍牆」「鴿子籠」と訳された2篇の小説が陳喜儒の翻訳で載っている。冒頭に高橋の写真掲げた解説があり、彼が第37回の文学界新人賞と第79回の芥川賞を受けたことなどが紹介されている。「鴿子籠」の解説が興味を引くので、次に引用してみよう。

《鴿子籠》則写一个誠實的小學生蒙受不白之冤，悲慘地結束了自己的幼小生命，這種因成人不理解兒童而造成的悲劇在日本是一種社會問題。

1985・2号には水上勉の小説「貴船川」と「寺泊」が、「水上勉小説兩篇」の見出しで掲載されている。訳者は柯森耀。前号の高橋の場合と同じように、冒頭に水上の写真掲げた解説があるが、ここではそれには触れずに、「寺泊」の冒頭の部分の訳文を参考までに引用しておこう。

大雪紛紛斜瀉在寺泊的海岸，大海呈現污穢的灰色。也許是刮起了沙丘的沙的緣故，大浪宛如褐色的長布卷向空中，隨即又平息下去，向海岸涌來。

1985・3号には日本の文学者の作品はない。「外国文芸動態」の「児童文芸動態」のところに、大阪府立国際児童文学館が4年を経て、1984年5月5日に開館したこと、その内容が紹介されているばかりであった。

『外国文学』（外語教学与研究出版社出版，北京報刊發行局發行）この雑誌は週刊誌大で毎月95～96頁の月刊誌である。購入したのは1984・10号、1985・1～6号の7冊であったが、1985・6号に城山三郎の小説「一个家庭的悲歡」が楊達の訳で載っているだけであった。この小説は教育

ママの問題を扱っており、冒頭の解説では、その問題の根源を日本の資本主義社会の教育制度に求め、中国の若い両親にも大いに参考になるだろう、と説いている。つまり、そのような文学の受容の仕方が、ここには見られるのである。

さて、この雑誌にも「外国文学動態」という欄があり、1985・2号では野上弥生子の百歳の祝賀を日本文芸家協会等の文学団体が催したことを、1985・4号では第92回の芥川賞が木崎里子の「青桐」に決まったことと、第92回の直木賞に該当者がなかったこと、それに、日中交流に尽した前嶋信次の遺著『空海入唐記』が出版されたことを、そして、1985・5号では、埴谷雄高の「死霊」の第7章『最後の審判』が講談社から出版されたことと、井上靖が1984年度の朝日賞を受賞したことを、それぞれ報じ、その業績を紹介している。

『外国文学研究』(外国文学研究雑誌社出版、武漢市郵局発行)この雑誌は週刊誌大で、150頁の季刊誌。編集部が武昌華中師範学院に置かれている。1985・1号(3月25日発行)しかないが、この雑誌の「国外研究動態」欄に、第91回の芥川賞候補に干刈あがたの「ゆっくり東京女子マラソン」があがったけれども、結局は該当作がなかったことと、有吉佐和子が逝去したことが、紹介されていた。ちなみに中国語に翻訳された干刈の作品名は、「漫長的東京女子馬拉松」。

季刊のせいもあって、この雑誌のニュースは、前述の『外国文学』よりも遅いようである。

『訳林』外国文学季刊(江蘇人民出版社出版、南京郵政局発行)この雑誌も週刊誌大で、270頁の雑誌である。東山魁夷「風景使我重見光明」(陳徳文訳)、徳富芦花「此刻的富士黎明——明治三十一年一月記」(陳徳文訳)、竹西寛子「福寿草」(劉春英訳)の3つの随筆を載せ、陳徳文が「日本散

文文学」を書いている。これは日本の文学芸術の一分野を占める随筆の歴史とその特色を述べた論文で、同時にまた、上掲の3篇の随筆の紹介を兼ねたものともなっていた。

この雑誌にはもう1つ、譚晶華の「日本情報小説」という論文があって、譚はそこで日本の小説に情報社会と密接に関わる情報小説の系譜があることを指摘し、それを結城晶治、中藺英助、三好徹、五木寛之、生島治郎、城山三郎、梶山季之、堺屋太一、山崎豊子等の系列に見ている。

さて、これらの載っているのは1984・4号であるが、この雑誌もこの号しか持っていない。発行は1984年10月1日である。この号の「世界文壇動態」には、野間宏の長篇小説『生生死死』上部が完成したこと、日本の純文学創作が不景気であること、有吉佐和子の突然の逝去を日本文芸界が哀悼したこと、第91回の芥川賞がまた該当なしだったことの4つの日本関係の記事が取り上げられていた。

なおこの雑誌の巻末に、「本刊1984年総目録」があって、それを見ると次のような日本の作品が、翻訳掲載されていたことが分かる。

三浦綾子『臨死還害人』(中篇小説) 銭希林訳、黒岩重吾『陰暗的河』(短篇小説) 肖立訳、山崎豊子原作・橋本忍編劇『白色巨塔』(電影劇本) 李正倫訳および李正倫「読<白色巨塔>」(作品評介)、松山善三編劇『默默无声的人』 莫邦富訳および莫邦富「関于<默默无声的人>」(作品評介)。

『当代外国文学』(南京大学外国文学研究所出版、江蘇省南京郵政局発行)この雑誌も週刊誌大で、160頁の季刊誌である。手元にあるのは1984・4(総第18期)号1冊であるが、この号には「井上靖短篇小説選訳」と題して、井上靖の小説4篇が訳載されている。すなわち、陳徳文訳「少年」、

呉之桐訳「帽子」、兪琦訳・望寧校「撒網」、周国竜訳「賽馬」。冒頭に編者の「前言」があって、作者に関する詳しい紹介と、作品の解説が載っている。その中でこれらの小品および小説の価値について、筆者は次のように述べている。

叙事和抒情渾然一体，自然洒脱，洋溢着醇美的诗意，是小说，又似散文，具有較高的文学價值。

また、「撒網」の登場人物辰吉については、「從这个人物身上可以看到日本下層人民勤劳朴实的優秀品德」と述べ、「作者運用白描的手法，突現了這个人物的性格特点，給讀者留下了深刻的印象」とこの小説の特色を指摘している。なお、「撒網」とは「投網」，「賽馬」とは「馬とばし」の漢訳である。

ところで、この雑誌の巻末には「《当代外国文学》第1—18期総目録」が掲げられていて、そこには以下のような日本文学の作品が見受けられた。

〈中篇小说〉川端康成「温泉旅館」葉渭集訳，〈短篇小说〉佐野洋「蛇迹」陳徳文訳，「日本横光利一兩篇小説」陳徳文等訳，阿刀田高「八卦談」呉之桐訳，〈詩歌〉「日本の俳句」陳徳文訳，「与謝野晶子詩三首」林璋訳，〈散文〉「日本散文八篇」劉光宇等訳。（散文とは日本の隨筆に相当するもの。）

『外国小説』（哈尔滨文芸雜誌社編集出版，哈尔滨市郵局發行）この雑誌も週刊誌大で，64頁，双月刊の雑誌である。9月5日の発行の1984・5号しか手に入れることができなかったが，この号には井上靖の「俘虜」（日本名「俘囚」）と，佐藤愛子の「總統小夜曲」が，それぞれ李有寛，唐大本の訳で掲載されていた。

『訳海』（花城出版社（広州市）出版，広東省新華書店發行）これも週刊誌大，176頁の季刊誌である。

たまたま手に入れた1冊は1984年第4期（12月1日発行）であるが，この号には「野口米次郎詩兩首」と題して野口の2編の詩「我崇拜太陽」「向日葵」（ともに武繼平訳）が掲載されている外に，三好徹の小説「単色的虹」（陳浩訳），川端康成の小説「参加葬礼的名人」（葉渭渠訳），および夏樹静子の小説「余生」（朱明燕訳）が載っていた。野口米次郎については，簡単な紹介があって，そこには次のように書かれている。

野口米次郎(1875~1947)，日本現代著名詩人。生于日本愛知県。卒業于日本慶応大学。代表作《兩重国籍者の詩》(1922)《一个苹果墜落》(1923)等。此外還著有《Seen and unseen》《From the Eastern Sea》等英文詩集。

また，三好徹の小説については，日本文芸家協会編『1981年優秀小説選』より訳出した旨の注がついていた。

この雑誌にはその他に李正倫の「《古都》初探」という論文と，朱金和の「日本文学流派“第三新人”及其作品」という論文が載っている。前者は作家の紹介と作品の特色について述べた文である。そこで筆者は，ノーベル賞受賞後の川端について「川端晩年由于思想空虚，政治上苦悶，創作能力枯竭，于1972年含煤气管自殺」と紹介している。しかしその小説『古都』については，これを美的観点から追求し，その特質を「作品描写了人物的外在美与心靈美，山川美，草木美，古代文物美，服飾美，傳統習俗美，甚至食物也是美的」ととらえ，「這是一部高水平的抒情之作，写景状物的傑作，從民俗学的观点来看，也是一部風俗画卷」と，高く評価している。

第三の新人について述べた朱金和の論文は，日本の評論家のそれについて論じた評論および，山本健吉が名付けた第三の新人たち，たと

えば安岡章太郎、庄野潤三、小島信夫、島尾敏雄、阿川弘之、三浦朱門、遠藤周作、曾野綾子等の小説を読んで、その文学的傾向を中国の読者に紹介する形式の論文であった。そういった意味において、これは現代日本文学についての、中国における啓蒙的な論文と見ることができよう。

さてこの雑誌には、以上の他にもう1つ、日本の作家に関連する記事が掲載されていた。それは「作家的洞察力」と題する次のようなものであった。小説『白い巨塔』で有名な山崎豊子が、中国の読者にもよく知られている『華麗なる一族』を雑誌に連載している間に、小説に描かれていることと同じ事件が現実が発生した。それは日本第8位の勸業銀行と第6位の第一銀行が合併するという大事件であった。

つまりこの欄の筆者は、山崎の洞察力が小説の中で、現実起こる事件を実際に予測したことを書きたかったのであろう。この記事でも分かるように、中国での山崎豊子の評価は、非常に高いものがある。

以上、日本語・日本文学の専門誌以外の雑誌に紹介されている日本文学を並列して展望してきた。それを簡単にまとめてみると、以下のようになるかと思う。

①日本文学界の最新情報は「世界文芸動態」「外国文芸動態」「外国文学動態」「世界文壇動態」等にいち早く取り入れられて紹介されている。

②翻訳掲載されている作家および作品は、比較的新しいものが多い。

③日本の資本主義社会およびその矛盾を反映した作品作家が注目されている。

④随筆(散文学)、シナリオ、詩歌、俳句等も広く紹介されている。

⑤美的観点からの文学受容がなされている。

⑥中国における日本文学の啓蒙的な紹介が行われている。

⑦中国と深く関わっている作家や作品が尊重されている。

(2) 専門雑誌および翻訳書

日本語および日本文学の専門雑誌が中国でどれだけ出版されているのか、じつは私にはよく分からない。分かっているのは次の三誌だけである。

『日本文学』(长春市、吉林人民出版社出版、长春市郵局発行) 220×140の大きさ、300頁前後の季刊誌。聞くとところによると、かつては吉林大学で出していたものだという。

『日語学習与研究』(北京対外貿易学院<日語学習与研究>編集委員会編、同雑誌社出版、北京市郵局発行) 週刊誌大、100頁前後、双月刊の雑誌。

『日語知識』(大連外語学院編、<日語知識>雑誌社出版) 小型の雑誌。⁸⁾

これらの雑誌を詳しく紹介しているゆとりがなくなってしまった。そこで、ここではざっと展望するだけにとどめ、次の機会を待つことにしたい。

『日本文学』は毎号特集を組んでいる。1984・3号は野間宏特集、1984・4号は田宮虎彦特集、1985・1号は有島武郎特集となっている。いずれも社会と人間との矛盾、社会の下層をその文学において取り扱っている文学者たちであって、そういった点において特集が組まれたものと考えられる。それぞれの作家の作品と、中国の研究者による作家論と作品論が収められている。特集以外には平岩弓枝、石坂洋次郎、大谷羊太郎、伊藤整、渡辺淳一、石川淳、太宰治、芝木好子、黒岩重吾、森村誠一等の小説が訳載

され、「論松本清張一兼評日本推理小説」(李徳純),「正岡子規論」(筆者和田克司,訳者劉富庚),「試論日本明治時期的批判現実主義文学」(柴明俊),「論『家』的思想」(倪玉),「日本現代文学特点初探」(唐月梅,葉渭渠)等の論が掲載されている。また、呂元明の文学史講座があって、1984・3号、1984・4号には鎌倉室町時代の、1985・1号には江戸時代(上)の文学史が載せられている。それぞれの号の巻末には、東北師範大学外国問題研究所日本文学研究室の「五四運動以来日本文学研究与翻訳目録」が付せられていて、たいそう有益であるが、ここに転載するゆとりはない。その他では、劉振瀛による謡曲「熊野」の翻訳とその紹介が興味をひいた。

『日語学習与研究』は1984・2, 4, 5, 6号と1985・1, 2, 3号の計7冊がある。これは中国における日本語の学習と研究のための雑誌である。したがって、桜井満「日本の古典一万葉の心と言葉」、松浦友久「和歌・俳句の漢訳についてーリズム論の観点から」といった、日本語で印刷された論文も載っている。この雑誌にはまた「現代日本文学対訳読物」の欄があって、以下のような作家の作品が掲載されている。

梅崎春生「猫の話」、和辻哲郎「木の根」、清岡卓行「ミロのヴィナス」、壺井栄「夏みかん」、国木田独歩「友愛」、永井竜男「胡桃割り」、有吉佐和子「青い壺」、新美南吉「ごん狐」、中野重治「根」、水上勉「石を抱いた木」、若山牧水「河豚」、夏目漱石「変な音」、安部公房「赤い繭」、野上弥生子「諏訪渡り」、畑山博「虫」、川端康成「石榴」、生島治郎「ダイニング・メッセージ」、野上弥生子「片脚の問題」、菊池寛「入れ札」、井上靖「空さん」、星新一「友情の杯」、森鷗外「うたかたの記」、柴野民三「命をかけて」。

その他には「文学講座」と「日本古典文学選

読」の項目があり、前者には李芒「“無頼派文学”初探」、同「日本文学欣賞芻議」、王長新「自然主義与日本自然主義文学」、李芒「論葉山嘉樹」、王宣「日本文学的歴史發展的形態」、李芒「論徳永直」、申非「《雨月物語》と《剪灯新話》」、李芒「日本文学的特点」、羅興典「日本近代文学的黎明一新文体的創立」の論文が収められ、後者には、『方丈記』、『平家物語』祇王、『雨月物語』浅茅が宿、『今昔物語集』、『世界胸算用』が取り上げられていた。

また、私の持っているもののうち、最も新しい1985・3号には、李芒「平安朝宮廷貴族的恋情画卷一《源氏物語》初探」と申非「《平家物語》与中国文学」とが載っていた。

次に『日語知識』であるが、これについては二葉亭四迷「浮雲」の紹介、柳田光紀の詩「黄河のほとり」の漢訳などが載っていたという報告だけにとどめておきたい。

さて、次は単行本(翻訳書等)について触れておきたい。雑誌に取り上げられていた日本の作家や作品には、戦後発表された比較的新しいそれが多かったが、単行本として発行されているものには、古典や戦前のものも多く含まれている。中国滞在中に私が手に入れたものには、次のようなものがあった。

『万葉集⁹⁾』上下(楊烈訳)、『源氏物語¹⁰⁾』上中下(豊子愷訳)、『平家物語¹¹⁾』(周啓明,申非訳)、『夏目漱石小説選¹²⁾』上(陳徳文訳)、有島武郎『葉子¹³⁾』(謝宜鵬,卜国鈞訳)、『芥川龍之介小説十一篇¹⁴⁾』(楼適夷訳)、小林多喜二『蟹工船¹⁵⁾』(葉渭渠訳)、小林多喜二『防雪林¹⁶⁾』(文潔若訳)、手塚英孝『小林多喜二伝¹⁷⁾』(卞立強訳)、谷崎潤一郎『春琴伝¹⁸⁾』(張進等訳)、谷崎潤一郎『細雪¹⁹⁾』(周逸之訳)。

これらは中国で刊行されたもののうちの一部に過ぎない。たとえば『外国文芸』1985・1号

に、上海訳文出版社 1985年1月～2月文芸新書として紹介されている、住井末(すゑ)『没有橋的河(橋のない川)』第3部(張嘉林等訳)や、同じく『外国文芸』1985・3号に紹介されている漱石の『門』(吳樹文訳・上海訳文出版社刊)も持っていない。この上海訳文出版社は、日本文学の翻訳書を数多く出版しているところらしいから、中国全体ではおびただしい数の日本文学の翻訳書が刊行されているものと思われる。しかも上に掲げた例によっても分かるように、その文学分野は多様であり、その文学思潮も多様である。このように、現代の中国における日本文学の受容は、非常に幅のあるものであった。

おわりに

1985年1月、北京大学に行った折り、王長新著『日本文学史』(外語教学与研究出版社(北京外語学院内)刊、1984年4月第1版第2次印刷、16500部発行、271頁)を、小売部で購入した。これは4ページの序言を除いた全てのページが、日本語で書かれたものであった。内容は古代の文学、中世の文学、近世の文学、近代の文学と分かれ、上は『古事記』(神話伝説文学)から、下は新感覚派(川端康成)の文学まで、時代順に述べられていた。その序言に「本書は作為高等学校日語専門的日本文学史課教材而編写的」とあるから、高校の日語専攻生のテキストとして編まれたものと考えられるが、広い視野から日本文学を展望したものであった。このテキストの編纂態度にも見られるように、中国における日本文学の受容は多様な態度によってなされていることを、この稿をまとめながら知った。その研究もまた同じであった。そこで最後に、その受容と研究の傾向をあえて幾項かにまとめておきたい。

- ①美的観点に立って作品にアプローチしているもの。
- ②比較文学の手法で研究しているもの。
- ③社会主義の思想を軸に作家、作品を検討しているもの。
- ④中国における日本文学の啓蒙的な紹介。
- ⑤作品を道徳的・倫理的に受け取っていくもの。
- ⑥作品に日本社会の矛盾、歪みを追求していくもの。

以上のうちのひとつの傾向ではなく、幾項かの傾向が混ざり合いながら、日本文学の研究と受容がなされているというのが、私の到達した結論であった。

〈注〉

1) 在中華人民共和国日本語研修センター紀要『日本語教育研究論纂』(国際交流基金刊)の文学関係の論文を参考までに掲げると、以下の通りである。

〈第1集〉1983年、第1・2期生分

韓貞全「独歩の詩情と人間観—『少年の悲哀』『窮死』について」

郭来舜「日本自然主義文学思潮ノート」

陳徳文「島崎藤村の『破戒』について」

金煥璣「新感覚派の文学について」

徐 瓊「『顔の中の赤い月』を読んで」

〈第2集〉1984・第3期生分

譚晶華「遠藤周作の文学と宗教」

俞 琦「『俘虜記』と『野火』における生と死」

陸茂思「むなしい現代人の存在」(大江健三郎「死者の奢り」が対象とされた論文である。)

張拓秀「夏目漱石の『それから』の中の百合の花と色彩」

王建康「坂口安吾の実存的な傾向『白痴』『続戦争と一人の女』及び『墮落論』について」

梁書明「防人歌論」

〈第3集〉1985年、第4期生分

劉利国「『濠端の住い』における志賀直哉の理論」

艾 特「横光利一の『蠅』について」

- 王際周「井上靖『姨捨』の世界」
- 陳 岷「社会への反逆『万延年のフットボールについて』」
- 齊 震「『ひもじい月日』試論—さくの自我のあり方をめぐって」
- 李 明「草、鳥、犬、猫と詩—萩原朔太郎の詩における形象のとらえ方」
- 桂玉植「本歌取りから見た新古今世界」
- 宿久高「菊花の契—『死生交』と対照させながら」
- ＜第4集＞1986年・第5期生分
- 朱美珍「ある側面から窺える樋口一葉像—その士族階級意識について」
- 李汝敏「現実暴露の傑作—国木田独歩の『竹の木戸』について」
- 邱 嶺「自分で選んだ敗北—漱石『坊っちゃん』」
- 李奇術「『羅生門』を読む」
- 孔令敬「芥川の『尾生の信』」
- 張 琳「芥川竜之介『酒虫』考」
- 劉徳潤「古典和歌の雪と『雪国』の雪」
- 金鉄成「『走れメロス』から見た太宰治の性格形成」
- 劉香織「太宰治の『魚服記』について」
- 韓 軍「孤独の人物造型—『樺の木』をめぐって」
- 孫久富「『貧窮問答歌』と『村居苦寒』の比較」
- 楊永良「孔子の『文質彬彬』説と古今集序の六歌仙評」
- 範関仙「道綱と蜻蛉日記」
- 2) これらの論文のうち(1)「研修生のレポートの場合」の項のそれと重なるものは、1985年4月以降の研修センターにおける研究会において、各講師の指導を受けてまとめた論文だからである。
- 3) 呉念聖氏の報告は「中国の日本文学熱いま盛り—「源氏」めぐり議論、文学大系も近く出版—」の見出しのもとに、「文化」欄に掲載されている。
- 4) これらは、いずれも注3)の呉念聖氏の文章を、ほぼそのまま引用させていただいた。
- 5) 『文芸欣賞』は主編が北京市文学芸術界联合会、発行が北京報刊発行局、『北京芸術』が改題された全部で40頁、週刊誌大の月刊誌。
- 6) 『報告文学』は人民日報社出版、北京報刊発行局発行、全96頁、週刊誌大の月刊誌。
- 7) 訳者の紹介は「1981年＜読売新聞＞拳辨第2次婦女題材征文、在1121篇応征作品中、＜大河一滴水＞獲大獎、并推選出一篇入獎作品和兩篇佳作。『厨房里的詩』是兩篇佳作之一。」とある。
- 8) この雑誌は北京語言学院で見ただけなので、発行所、頁数、その他不明である。
- 9) 「詩苑訳林」の一巻として湖南人民出版社(長沙市)より刊行。1984年7月第1版、22000部発行。沈佩璐、張勤、施小焯、鄭強校。なおこの叢書には他に『日本古典俳句選』(林林訳)がある。上は374頁、下は375~835頁。
- 10) 「日本文学叢書」の一巻として人民文学出版社(北京)より刊行。上は1980年12月第1版、40000部発行。1982年9月第2次印刷、205000部発行。中は1982年6月第1版、225000部発行、下は1983年10月第1版215000部発行。上は430頁、中は431~857頁、下は859~1291頁。
- 11) 「日本文学叢書」の一巻として人民文学出版社(北京)より刊行。1984年6月第1版、52000部発行、527頁。
- 12) 湖南人民出版社(長沙市)刊、1984年11月第1版、16700部発行、647頁。
- 13) 湖南人民出版社(長沙市)刊、1984年6月第1版、70700部発行、501頁。
- 14) 湖南人民出版社(長沙市)刊、1980年5月第1版、28000部発行、171頁。
- 15) 「文学小叢書」の一巻として人民文学出版社(北京)より刊行。1973年10月第1版、1980年3月第1次印刷、50000部発行、103頁。
- 16) 山西人民出版社(太原)刊、1982年3月第1版、292頁。これには小林多喜二の「防雪林」の他に山田歌子の「活下去」(文潔若訳)が収められている。『日本近代文学大事典』(講談社)によるとこの小説「生きる」は、塩釜の坂病院の患者であった鎌田うた子が、薬の包み紙をためて書いた生いたちを、医師の夫人高橋正子が創作の形にし、同病院のサークルを中心に討論した結果でき上がったものだという。したがって山田うた子という著者名は、実際にはそれらの人々全体を示すものであった。
- 17) 吉林人民出版社(吉林市)刊、1983年4月第1版、18720部発行、287頁。
- 18) 湖南人民出版社(長沙市)刊、1984年3月第1版、68800部発行、220頁。
- 19) 湖南人民出版社(長沙市)刊、1985年1月第1版。

59000部発行。644頁。

なお、注12) 13) 14) 18) について補説しておきたい。12) 『夏目漱石小説選』上には「三四郎」「それから」「門」が収められている。13) 『葉子』は「ある女」の翻訳。14) 『芥川龍之介小説十一篇』には「羅生門」「地獄変」「奉教人の死」「老いたる素戔嗚

尊」「秋山図」「藪の中」「報恩記」「お富の貞操」「六の宮の姫君」「戯作三昧」「山鳴」の11篇が収められている。18) 『春琴伝』には「小さな王国」(車向前訳)、「春琴抄」(張進訳)、「青春物語」(陳敏訳)の3篇が収載されている。